

ダニエル書8章「荒らす背きの罪」

1A 高ぶる角 1-14

1B 雄羊と雄山羊の戦い 1-8

2B 引き渡される天の軍勢 9-14

2A ガブリエルによる解き明かし 15-27

1B 終わりの憤りの時 15-19

2B 横柄で狡猾な王 20-27

本文

ダニエル書8章を開いてください。私たちはダニエル書の後半部分、ダニエルの受けた幻や夢の預言を読んでいっています。前回、7章のことを思い出してください、彼は四頭の獣が海から出て来たところを見ました。バビロン、メディア・ペルシヤ、ギリシヤ、ローマを表していました。けれども、2章にはなかった新しい人物が登場しました。ローマを表す第四の獣の十本の角の間から、小さな角が現われました。それが大きくなり、三本の角を倒し、人間の目を持ち、そして大きな口を持っていました。彼が、世の終わりに、キリストが到来される前に現われる反キリストであることを学びました。この人物こそ、ダニエル書の後半部分の中心人物です。「異邦人の時」を描くダニエル書は、異邦人の王たちによる横暴な統治の行く末が、この荒らす忌むべき者、背きの罪をもたらし、天の神を冒瀆する者の出現なのだ、ということを教えています。

そしてもう一つのテーマを、7章は与えてくれました。それは、聖徒たちがおり、彼らは一時、二時、半時の間、第四の獣の手に渡されるけれども、主が獣を滅ぼし、彼らは神の国を受け継ぐということです。異邦人の王たちは、立てられては、倒れます。その時にいかに彼らが自分の持っているものを、自分の思いのままに手にしているとしても、いつかは失うのです。しかし、神の御国は永遠に立ちます。私たちはこの世に生きていますが、必ずこの世界のものはキリストにあって私たちに与えられます。ですから、私たちがいかに、この世のものから聖め別たれていなければいけないかを思います。(ヨハネ 17:16-17)そして8章は、同じ主題でさらに深い預言の内容に入っていきます。

ところで、ダニエル書は2章から7章までがアラム語で書かれていました。それは、当時の国際貿易に使われていた言語がアラム語だったからです。ユダヤ人の使っていたヘブル語からアラム語に、使っている言語を移したということは、その使信がより異邦人たち、世界の諸国に対するものであったことが分かります。そして8章は、再びヘブル語に戻ります。つまり、ユダヤ人たちがどうなるのか、再び焦点を当てるのです。いつまでもバビロンにいるわけではありません、七十年経てば、エルサレムに戻ることを神は約束しておられました。そして、そこで荒らされていた神殿を再

建するのですが、神がいかに彼らの信仰と礼拝を回復されるのか、そのことに注目しています。

1A 高ぶる角 1-14

1B 雄羊と雄山羊の戦い 1-8

8:1 ベルシャツアル王の治世の第三年、初めに私に幻が現われて後、私、ダニエルにまた、一つの幻が現われた。

「初めに私に幻が現われて後」とは、七章で見た幻のことです。ダニエルは、バビロンの最後の王ベルシャツアルの治世の元年にその夢を見ました。今は「第三年」です。紀元前 550 年辺りのことです。

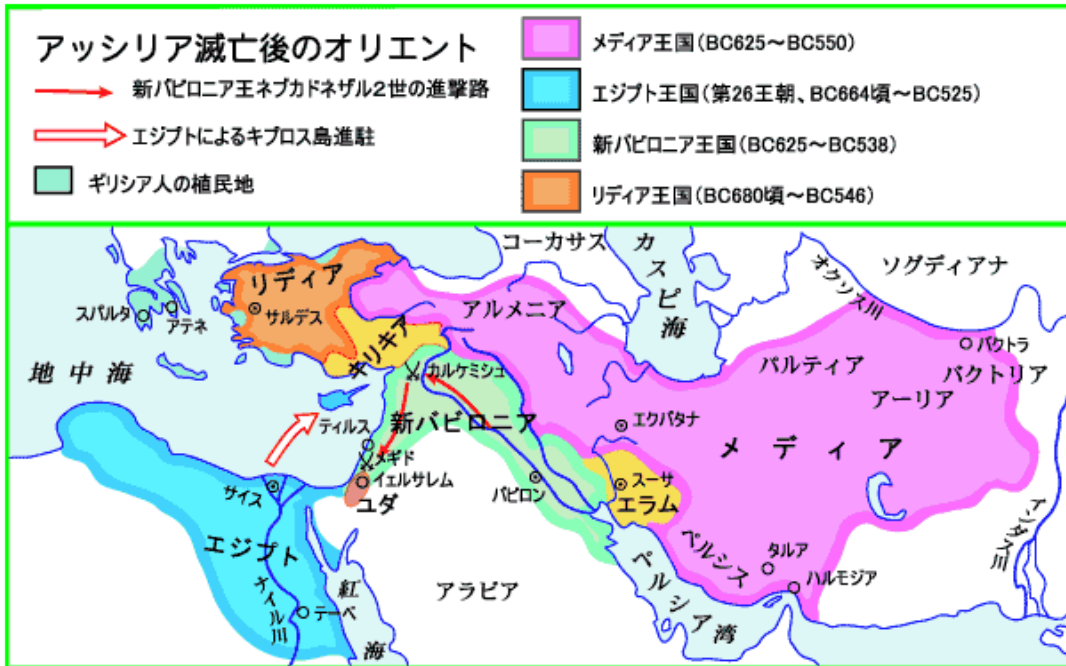
8:2 私は一つの幻を見たが、見ていると、私がエラム州にあるシュシヤンの城にいた。なお幻を見ていると、私はウライ川のほとりにいた。

「エラム州にあるシュシヤンの城」であります。シュシヤンは後のペルシヤの首都となる町であります。そして、「私はウライ川のほとりにいた」と言っていますが、これはシュシヤンの城の間を通っていく運河です。これはここが後に、エステル記の舞台となり、またネヘミヤ記においてネヘミヤがペルシヤの王に献酌官として務めたところです。ダニエルは、バビロン帝国のエラム州の州都に務めていたのでしょうか、それとも、幻の中でちょうど、かつてエゼキエルがバビロンからエルサレムに主の霊によって連れて行かれたように、連れて行かれたのでしょうか、単に夢のようにして見ていたかもしれません。

なぜ、ダニエルがシュシヤンにいるのでしょうか？それは、彼の見た幻が、まさにペルシヤから始まるからです。ベルシャツアルはあと 10 年そこそこで、メディア・ペルシヤによって殺されます。その後、主が一体何を行われるのか、それを幻によってダニエルに示されるからです。

8:3 私が目を上げて見ると、なんと一頭の雄羊が川岸に立っていた。それには二本の角があつて、この二本の角は長かつたが、一つはほかの角よりも長かつた。その長いほうは、あとに出て来たのであつた。

この雄羊は、メディア・ペルシヤ帝国の姿をよく表しています。7 章においては、第二の獣として熊のような姿で現れましたが、ここでは雄羊です。二本の角は、メディア国とペルシヤ国を表します。初めに、今のイラン北西部にメディア王国が台頭していました。そして、ペルシヤ王国はメディアに従属する小国に過ぎませんでした。ペルシヤ王国の王子として生まれたクロスは、メディアに反乱を起こし、勝利して、統一王朝メディア・ペルシヤとしました。したがって、後に出て来た長い角がペルシヤであり、メディアを後に凌いだのです。



18:4 私はその雄羊が、西や、北や、南の方へ突き進んでいるのを見た。どんな獣もそれに立ち向かうことができず、また、その手から救い出すことのできるものもいなかった。それは思いのままにふるまって、高ぶっていた。

主はダニエルに、非常に詳しい預言を与えておられます。「西や、北や、南の方へ突き進んでいる」とあります。まさに、メディア・ペルシヤ王国は、初めに西方に遠征に行きました。リュディア王国が小アジア西部にありましたがそこを紀元前 547 年に打ち破っています。それから東方に戻りバビロンを 539 年に征服しています。それでもペルシヤの西にあります。そして、次に「北」を攻め取りました。ゾロアスター教の中心地であったバクトリアを従属させます。クロス王はその後、死んでいます。息子カンビュセス二世が 525 年にエジプトを併合して、当時の古代オリエントの世界を統一しました。ですから、「南の方へ突き進んでいる」とあります。

このように、勇ましいペルシヤの戦いではありますが、主はダニエルに対して、彼らが、「それは思いのままにふるまって、高ぶっていた。」と言っています。彼らが戦いにおいて、誰もそれを止めることはできず、自分は思いのままふるまえるとうぬぼれて言ったのです。それで、高ぶりました。私たちがこれまで見て来たように、またローマ 13 章にあるように、力と権威は全て神から来ています。ところが、それが自分自身に属しているかのようにみなすときに、それが高ぶりとなります。詩篇 49 篇 20 節に、神からの警告があります。「人はその栄華の中にあっても、悟りがなければ、滅びうせる獣に等しい。」

8:5 私が注意して見ていると、見よ、一頭の雄やぎが、地には触れずに、全土を飛び回って、西

¹ http://www005.upp.so-net.ne.jp/nanpu/history/babylon/maps/after_assyria.html

からやって来た。その雄やぎには、目と目の間に、著しく目だつ一本の角があった。

ギリシヤのことです。7章においてギリシヤは、四つの頭、四つの翼を持つ豹でありました。ここでは、地に触れずに全土を飛び回っている雄山羊です。これは、驚異的な速度で当時知られた世界を征服した、「アレキサンダー大王」こと、アレクサンド



ロス三世です。「目と目の間に、著しく目だつ一本の角」とありますが、まさしくアレクサンドロスの形容にぴったりです。彼の天才的な軍事指揮者としての才能が、敏速な遠征を可能にしました。自分がギリシヤの王に即位してわずか 13 年で、当時知られていた世界を、南はエジプト、東はインドに至るまで征服したのです。²

8:6 この雄やぎは、川岸に立っているのを私が見たあの二本の角を持つ雄羊に向かって来て、勢い激しく、これに走り寄った。8:7 見ていると、これは雄羊に近づき、怒り狂って、この雄羊を打ち殺し、その二本の角をへし折ったが、雄羊には、これに立ち向かう力がなかった。雄やぎは雄羊を地に打ち倒し、踏みにじった。雄羊を雄やぎの手から救い出すものは、いなかった。

紀元前 334 年にアレクサンドロスは、ペルシヤに対して遠征を開始します。初めは小アジアでの戦いを行ない、アンティオケの北西にあるイツソスにて 333 年にペルシヤのダリヨス三世と戦い、打ち勝ちます。それがここ 6 節に書かれている、「あの二本の角を持つ雄羊に向かって来て、勢い激しく、これに走り寄った。」というところです。それから、彼はさらに東方に行く前に、エジプトを征服するべく南下します。そして、エゼキエルの預言で私たちが読んだ、ツロの包囲が 332 年に起こります。



ツロの沖合にある離島まで陸地の瓦礫を海に投げ入れて、道を造り、攻め取ったという話です。それから南下してガザを包囲、そしてエジプトでは大した戦闘もなく征服しました。343 年のことです。彼がゼウスの子として認められ、それで地中海沿岸にある有名な町アレクサンドリアが、彼の名にちなんでつけられています。

² <http://www.uraken.net/rekishi/reki-eu07.html>

そして7節の内容に入ります。331年にイラク北部における「ガウガメラの戦い」であります。これが天下分け目の戦いとなり、アレクサンドロス軍四万七千は、チグリス川上流のガウガメラで二十万とも三十万ともいわれたダリヨス指揮下のペルシヤ軍を破りました。ダリヨス三世はそこから逃走したものの、後に部下に殺されてしまいます。アレクサンドロスは、ペルシヤの中枢であるバビロンやシュシヤンに行き、略奪をし、徹底的に破壊しました。

8:8 この雄やぎは、非常に高ぶったが、その強くなったときに、あの大きな角が折れた。そしてその代わりに、天の四方に向かって、著しく目だつ四本の角が生え出た。

アレクサンドロスも、ペルシヤの王と同じく、破竹の勢いで戦っていく中で高ぶっていきました。この後は、中央アジアを攻め、そしてインドに遠征し、制圧していきます。この時から部下たちから疲労困憊であり、進軍を拒否したので、やむなく兵を返すことにしました。そして324年、ペルシヤの首都であったシュシヤンに戻り、ダリヨスの娘と結婚します。そして彼はバビロンにおいて、その後の帝国を治めようとしていましたが、多くのペルシヤ人を起用しました。こうやって専制君主となり、地元のマケドニア人の反発を買いました。ところが、323年、次にアラビア遠征を計画している時に、蜂に刺されて祝宴中に倒れました。そして、十日間高熱に侵されて、「最強の者が帝国を継承せよ」という遺言し、なんと32歳の若さで死去しました。これが、「その強くなったときに、あの大きな角が折れた」という言葉であります。まさに、「箴言 16:18 高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。」であります。

しかし、その遺言の通りに動こうとした將軍たちは、覇権争いをしました。アンティノゴス、セレウコス、プトレマイオス、そしてカッサンドロスです。アンティノゴスは小アジア、セレウコスがバビロンとシリヤ、プトレマイオスがエジプト、そしてカッサンドロスがギリシヤとマケドニアです。それが、「天の四方に向かって、著しく目だつ四本の角が生え出た」という言葉になります。そして私たちはダニエル書 11章において、このギリシヤが四分割された中で、南のプトレマイオス王朝と北のセレウコス王朝の長い戦争の歴史を読んでいくことになります。

2B 引き渡される天の軍勢 9-14

8:9 そのうちの本の角から、また一本の小さな角が芽を出して、南と、東と、麗しい国とに向かって、非常に大きくなっていった。

9節から14節までは、今話した、セレウコス朝の中から出て来た、アンティオコス四世、あるいは「アンティオコス・エピファネス」という人物の預言となります。ここに、「一本の角から、また一本の小さな角が芽を出して」というのが、それです。彼はローマに人質になっていましたが、王セレウコス四世の死後、彼の息子の後見人となることに成功、そしてその息子を暗に葬り去ることに成功しました。紀元前175年に即位します。このように、何でもないところから巧みな口と計略によって

権力を持っていきました。ダニエル書 7 章においては、第四の獣、すなわちローマの十本の角の間から小さな角が出て来ました。そして大きくなっていきました。彼こそが反キリストであります。けれども、このギリシヤの王の預言は、その反キリストを予め表すような、前触れのような人物だということです。アンティオコス・エピファネスという人物が行なったことは、まさしく将来、反キリストが行なうことを予め表しているようなことであります。

彼の名前「エピファネス」の意味は「顕現」です。彼は自らを「セオス・エピファネス」と名のりしました。まさに「現人神」であります。自らを高く引き上げ、自らが神になったことを宣言する反キリストを指し示すにふさわしい人物です。アンティオコス・エピファネス、またユダヤ人のマカバイ家についての記録は、プロテスタントの聖書では「外典」とされている「マカバイ記」にあります。旧約聖書は「マラキ書」で終わっていますが、このダニエル書によって新約時代にまでの歴史がつながっています。マラキが預言したのはペルシヤ時代ですが、ダニエルはペルシヤからギリシヤ、そしてギリシヤからローマに至るまでそこで起こることを預言しています。けれども「マカバイ記」は、このダニエルの預言を確認するような歴史的な記録がたくさん載っています。確かにこの書物は神の靈感を受けていないものであり、外典にすべきものですが、それでも歴史的には貴重な史料です。

「南と、東と、麗しい国に向かって」とあります。ありますが、彼について有名なのは、南へのエジプト、プトレマイオス朝への遠征です。そこで勝利を収めた、征服まで行こうとしていたのですが、その地域の軍事バランスが崩れるのを恐れたローマ軍が介入して、断念せざるを得ませんでした。そして彼は帰る時に、エルサレムを徹底的に破壊します。彼の特徴は、究極のギリシヤ化、ヘレニズム化です。ユダヤ人がユダヤ人であることをやめるために、あらゆる迫害を行ないました。そしてローマへの賠償金を払うために、違法な取り立てを行ないました。そこで、ここで「東」とは、その時勃興していた、イランのほうにあるパルティア王国のことです。それから「麗しい国」は、まさにイスラエルのことです。主が気にかけておられるのは、この麗しい国イスラエルで何が起こるかということであり、そのことに集中して、啓示をダニエルに与えられます。

8:10 それは大きくなって、天の軍勢に達し、星の軍勢のうちの幾つかを地に落として、これを踏みにじり、8:11 軍勢の長にまでのし上がった。それによって、常供のささげ物は取り上げられ、その聖所の基はくつがえされる。8:12 軍勢は渡され、常供のささげ物に代えてそむきの罪がささげられた。その角は真理を地に投げ捨て、ほしいままにふるまって、それを成し遂げた。

この男は、非常に大きくなり、高ぶっていますが、それは他の国の王たちにあるような武力による遠征だけで終わりませんでした。ここにあるように、「天の軍勢に達し、星の軍勢」にまで手を出したということです、これは簡単に言うと、神の立てられたユダヤ人たち、その祭司たちのことを指しています。

神の聖なる民に対して挑みかかったということは、そのまま彼らを守っている天使らに対して挑んだこととなります。ダニエル書 10 章に、イスラエルの君としてミカエルが登場します。そしてここ 8 章と 9 章でガブリエルがユダヤ人とエルサレムについて神からの託宣を受け、ダニエルに話しています。その他、律法は天使から与えられたものであることを聖書は教えていますし(使徒 7:53 等)、彼らには天使らが付いていたのです。そして神の民自身についても、聖書ではしばしば「星の輝き」に例えています。アブラハムに対して、子孫が数多くなることを「星」のように増えると言われました。ダニエル書自体にも、12 章 3 節で「思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。」と語っています。

ユダヤ人の中でもヘレニズム文化を受け入れる者もいたため、この者たちを高く起用して、伝来のヘブル人としての信仰を破壊しようとした。それで 11 節の、「軍勢の長にまでのしあがった」というのは、大祭司の地位を自分のほしきままにしたと解釈できます。当時、オニアス三世が大祭司でありましたが、彼の弟ヤソンが王に対して同胞をギリシヤ化すると約束し、多額の賄賂をエピファネスに渡しました。それで、本来、アロンのツアドク系が祭司にならなければいけないのに、そこで任命制となってしまいました。そしてビスガ族のシモンという人物がおり、彼がオニアス三世と対立しました。彼は神殿に隠し財産があるとセレウコス朝の総督に伝えました。そのシモンの息子がメネラオスであります。彼はさらに多くの賄賂を王につぎ込んで祭司職を買いました。そして、オニアスを暗殺するのです。こうやって大祭司の制度が、金と権力の抗争の場と化してしまいました。

そして、「常供のささげ物」が取り上げられたとありますが、これは日毎に青銅の祭壇の上で捧げなければいけないと神が命令された掟です。出エジプト記 29 章 38 節以降にあります。朝に夕に、それぞれ雄羊をささげなさいと命じられています。これをエピファネスは止めさせました。止めさせただけでなく、同じところにゼウス神の祭壇を造り、そして豚を捧げさせました。そして豚の血液を聖所中に撒き散らしたのです。それでここに「そむきの罪がささげられた」とあるのです。そのほか彼は、安息日を守る者、割礼を男の子に授ける者などを虐殺し、異教の祭りに強制的に参加させ、神に忠実なユダヤ人たちを徹底的に滅ぼし、さもなくは墮落させました。この「荒らす者のする背きの罪」というのが、後に「荒らす忌むべき者」という反キリストの称号となり、イエス様もオリーブ山で「預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が聖なる所に立つのを見たならば(マタイ 24:15)」と言われたのです。

その該当する箇所を、マカバイ記第一 1 章 54 節から読みます。「第百四十五年、キスレウの月の十五日には、王は祭壇の上に「憎むべき破壊者」を建てた。人々は周囲のユダの町々に異教の祭壇を築き、家々の戸口や大路で香をたき、律法の巻物を見つけてはこれを引き裂いて火にくべた。契約の書を隠していることが発覚した者、律法に適った生活をしている者は、王の裁きにより処刑された。悪人たちは毎月、町々でイスラエル人を見つけては彼らに暴行を加えた。そして月

の二十五日には主の祭壇上にしつらえた異教の祭壇でいけにえを捧げた。また、子供に割礼を受けさせた母親を王の命令で殺し、その乳飲み子を母親の首につるし、母親の家の者たちや割礼を施した者たちをも殺した。(54-61 節)」とてつもない迫害です。まさに聖所の基がくつがえるような出来事です。

8:13 私は、ひとりの聖なる者が語っているのを聞いた。すると、もうひとりの聖なる者が、その語っている者に言った。「常供のささげ物や、あの荒らす者のするそむきの罪、および、聖所と軍勢が踏みじられるという幻は、いつまでのことだろう。」8:14 すると彼は答えて言った。「二千三百の夕と朝が過ぎるまで。そのとき聖所はその権利を取り戻す。」

二人の「聖なる者」が会話をしています。おそらく天使でしょう。ダニエルに聞こえるように話しています。この荒らす者のする背きの罪は「二千三百の夕と朝が過ぎるまで」と答えています。これが驚くべき正確さで、歴史上で成就しました。エピファネスによる徹底的な迫害とギリシヤ化によって、反旗を翻したユダヤ人たちがいました。マカバイ家の人たちです。ユダ・マカバイの率いる軍がセレウコス軍を打ち負かし、ついにエルサレムからも追放しました。この勇猛な戦いも、マカバイ記第一に詳細に記されています。そして、その戦争の結果、後にユダヤ人の独立勢力であるハスモン朝が成立します。

紀元前 167 年に、セレウコス朝の将軍リュシアスは、アンティオコス四世の代理としてユダヤ人達にゼウス神への奉納を命じました。エルサレムの祭司家やヘレニズム的な貴族らは親セレウコス朝の立場を取ってこれに従いましたが、地方都市モデインの祭司マタティアが、これを強制した人々を殺害しました。そしてマタティアが五人の息子たちと共に山中に隠れると、セレウコス朝に対する敵意を募らせていたユダヤ人がそこに集まった。マタティアはこれを軍に組織し、次第に本格的な反乱となっていきます。マタティアの死後、息子ユダがセレウコス朝からの独立を目指す戦争を開始しました。自分たちは貧弱な武装しかしていなかったのですが、ちょうどサウルの息子ヨナタンのように、「主の御心ならば、数が少ないのと、多いのは関係がない」と言って鼓舞し、勇猛に戦いました。それで、数々の戦いで相手側を撃破し、165 年末にエルサレムを包囲して、相手の軍を要塞に封じ込めて、エルサレムに入城しました。

そして 12 月 25 日、エルサレムからヘレニズム的な祭司を追放し、異教の祭壇を撤去することで神殿を清め、再び主なる神に奉献することができました。この出来事を記念するのが、「ハヌカー」と呼ばれるユダヤ教の祭りです。その二千三百日前、紀元前 171 年の初め、先にお話した正統な大祭司であるオニアス三世が殺害されて、ギリシヤに取り入る祭司職が始まりましたが、そこから数えてハヌカーがちょうど、二千三百日になります。

ところで、マカバイ家のユダが神殿を清めたその日を、「ハヌカー」としてユダヤ人は祝っていま

す。清めるに当たって、燭台を灯すための油は特別な調合が必要であり、時間がかかりました。一日分の油を合成して作ったのですが、次の合成まで八日かかりました。けれどもその八日の間、灯火は奇跡的に消えることがなかったそうです。それでハヌカーには、八本の枝のある燭台を使って光を灯してお祝いします。実は新約聖書に、この祭りのことが一箇所言及されています。ヨハネ 10 章 22-23 節です、新改訳ですと、「そのころ、エルサレムで、宮きよめの祭りがあった。時は冬であった。イエスは、宮の中で、ソロモンの廊を歩いておられた。」とありますが、新共同訳には「神殿奉献記念祭」と訳されています。ハヌカーのことです。ですから時は十二月の季節であり「冬であった」とあるのです。そして、これらのことを、実際に事が起こる 385 年前にダニエルに伝えているということなのです。

2A ガブリエルによる解き明かし 15-27

1B 終わりの憤りの時 15-19

8:15 私、ダニエルは、この幻を見ていて、その意味を悟りたいと願っていた。ちょうどそのとき、人間のように見える者が私の前に立った。8:16 私は、ウライ川の中ほどから、「ガブリエルよ。この人に、その幻を悟らせよ。」と呼びかけて言っている人の声を聞いた。

ダニエルは 14 節まで、幻を見ていました。この一連の幻の意味を悟りたいと願っていたところ、ウライ川の中ほどから声がしたのです。ダニエル書 12 章 7 節を見ますと、川の水の上に、亜麻布の衣を来た人が語っているとあります。10 章には、その亜麻布の衣を着た方は、主イエス・キリストご自身ではないかと考えられる方です。主が、ガリラヤ湖で水の上を歩かれる前から、既にウライ川の水の上におられたのでしょうか。

そして、その声を聞いて答えたのは、あのガブリエルです。彼は、イエス様の御降誕と、その前にバプテスマのヨハネの誕生を告げに来た天使として知られていますが、実はユダヤ人が福音書を読めば、逆に、「あっ、あのダニエルのそばにきて幻を解き明かした、あのガブリエルだ。」ということになったのではなっていたでしょう。主のご降誕の約 550 年前に、ガブリエルは既にここで活動していました。彼は 9 章において、七十週の期間についての預言もダニエルに伝えています。メシヤがエルサレムに入城されること、その後、殺されることも伝えています。つまり、彼は神の定められた時を告げるため、特にメシヤの到来について告げる御使いであることが分かります。

8:17 彼は私の立っている所に来た。彼が来たとき、私は恐れて、ひれ伏した。すると彼は私に言った。「悟れ。人の子よ。その幻は、終わりの時のことである。」8:18 彼が私に語りかけたとき、私は意識を失って、地に倒れた。しかし、彼は私に手をかけて、その場に立ち上がらせ、8:19 そして言った。「見よ。私は、終わりの憤りの時に起こることを、あなたに知らせる。それは、終わりの定めの際にかかわるからだ。

ガブリエルに語られただけで、ダニエルが恐れ、彼の声を聞いただけで意識を失ってしまいました。彼は再び意識を失う時があります。10章で、栄光の使い、先ほどの亜麻布を来た方に見えるからです。そして、ガブリエルが伝えたのは、これが「終わりの時のこと」そして「終わりの憤りの時に起こること」であるということです。ですから、私たちはこれまでアンティオコス・エピファネスに至るまでの幻をそのまま解き明かしていましたが、実はその近未来の歴史の中に、終わりの時の神のご計画が投影されているということです。「憤りの時」とあります、そうです、アンティオコス・エピファネスのように現れる反キリストに対して、神が憤りを注がれるところまでが啓示されています。

2B 横柄で狡猾な王 20-27

8:20 あなたが見た雄羊の持つあの二本の角は、メディアとペルシヤの王である。8:21 毛深い雄やぎはギリシヤの王であって、その目と目の間にある大きな角は、その第一の王である。8:22 その角が折れて、代わりに四本の角が生えたが、それは、その国から四つの国が起こることである。しかし、第一の王のような勢力はない。

ここまでは、先ほど説明したとおりです。メディア・ペルシヤをギリシヤが倒した後、その王アレキサンダーは夭折します。それから四人の総督に国が分割されます。

8:23 彼らの治世の終わりに、彼らのそむきが窮まるとき、横柄で狡猾なひとりの王が立つ。

「治世の終わりに」とありますがアンティオコス・エピファネスが死んだ後は、ギリシヤの力は弱まりローマがその地域に勢力を持ちました。そして「そむきが窮まる」とあります。11章で詳しく学びますが、プトレマイオス朝とセレウコス朝の王たちの戦いは裏切りと憎しみと高ぶりが錯綜したものでした。その確執が頂点に達した時にエピファネスが現れたのです。そして、これがこの世界の全歴史を示していると言ってもよいでしょう。国々が高ぶり、神を神と思わないようになり、その背きが極まる時に、横柄で狡猾な獣、反キリストが現れるということです。

エピファネスの特徴は「横柄」と「狡猾」です。非常に知性的で攻略と巧言によって地位を得ます。人々は、あからさまに横柄なことを言っている人に対しては、私たちは騙されませんが、巧言によって惑わしを受けます。11章の、彼の事を預言しているところを読みます。「11:21-24 彼に代わって、ひとりの卑劣な者が起こる。彼には国の尊厳は与えられないが、彼は不意にやって来て、巧言を使って国を堅く握る。洪水のような軍勢も、彼によって一掃され、打ち砕かれ、契約の君主もまた、打ち砕かれる。彼は、同盟しては、これを欺き、ますます小国の間で勢力を得る。彼は不意に州の肥沃な地域に侵入し、彼の父たちも、父の父たちもしなかったことを行なう。彼は、そのかすめ奪った物、分捕り物、財宝を、彼らの間で分け合う。彼はたくらみを設けて、要塞を攻めるが、それは、時が来るまでのことである。」彼は、人々には良く見せて、しかしその利己的な目的をその善意を見せながら、どんどん行っていきます。その権謀術数は非常に長けたものです。

そして7章に出て来た、あの小さな角、反キリストがそうでしたね。大きなことを語る口が角にありました。その口をもって、彼は神に対して汚しごとを語ります。「黙示 13:6 そこで、彼はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い始めた。すなわち、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。」

私たちはまだ、反キリストを見ていません。けれども、かつてのアンティオコス・エピファネスに働いていたその不法の霊は、今も働いています。「2テサロニケ 2:7 不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。」その霊が働いているので、アンティオコス・エピファネスのように鮮やかではないけれども、現代に至るまで似たような傾向を世の中で見えるのです。昔であれば、ローマ皇帝ネロは反キリストではないか？と言われていました。初めは善政をしていますが、途中から悪霊付きのようになってしまっ、自分でローマを放火して、それをキリスト者たちのせいにして、自分の庭にキリスト者を棒に吊るして生きたまま火あぶりにして、楽しんでいたと言われます。そして、ヒトラーの話は前回しました。それからスターリンもそうでしょう、北朝鮮の金日成もそうでしょう。スターリンは神学生であったところ、共産主義活動をして追放されました。金日成は熱心なキリスト教の家庭で育ちました。

ヨハネは第一の手紙を書いた時に、キリストが肉体を持って現れたことを否定するグノーシス主義者らが教会の中にいて、彼らのことを反キリストと呼びました。「2:18 小さい者たちよ。今は終わりの時です。あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現われています。それによって、今が終わりの時であることがわかります。」ここは、二種類の反キリストが書かれています。英語だと分かりやすいですが、「反キリストの来る」と言っているところは、定冠詞、つまり英語のtheがついています。これが、荒らす憎むべき者、不法の人です。特定の一人の人物です。けれども、「多くの反キリスト」と呼んでいるところは、そのまま複数形の反キリストども、ということです。つまり、不法の霊が働いているということです。反キリストの現れは後だけれども、その霊はすでに働いていて、偽教師たちの中に働いているということです。私たちは、気を付けないといけません。敬虔を装って私たちを騙し、そして非常に高ぶらせます。神ではなく、そこに人間の王座が置かれます。神の名、キリストの名を使いながら、実は自分の名が高められるように仕向けます。不法の霊は既に働いているのですが、けれども今、引き止める者がいます。聖霊の働きがあり、引き止めています。

8:24 彼の力は強くなるが、彼自身の力によるのではない。彼は、あきれ果てるような破壊を行ない、事をなして成功し、有力者たちと聖徒の民を滅ぼす。8:25 彼は悪巧みによって欺きをその手で成功させ、心は高ぶり、不意に多くの人を滅ぼし、君の君に向かって立ち上がる。しかし、人手によらずに、彼は碎かれる。

アンティオコス・エピファネスの狡猾さは、確かに彼自身の力ではありませんでした。その背後に、

不法の霊、またサタンが働いていたことでしょう。そしてあきれ果てるような破壊を行ないました。それから、地位と成功を得て、有力者を滅ぼしただけでなく、聖徒の民、ユダヤ人を滅ぼしていきましました。そして悪巧みで成功します。多くの者と同盟を組みます。そして地位を高めた後に、その同盟を破棄します。けれどもすでに高い地位に着いているので、その違反を責めることはできません。責めたところで、反逆の罪で裁かれます。そして、最後に「君の君に向かって立ち上がる」と言っていますが、ユダヤ人のメシヤ、キリストに公然と立ち向かったということも、もしかしたら言えるかもしれません。自分自身が神の現れだと言っているのですから。

そして、「人手によらずに、彼は碎かれる。」とあります。彼の死に方は無残でした。マカバイ記第二 9 章に書かれていますが、彼はペルシヤと戦い、退廃を余儀なくされましたが、腹いせにユダヤ人も殺そうと思いました。ところが、「その言葉を言い終えるやいなや、彼の五臓六腑に激痛が走った。(9:5)」とあります。イスラエルの神、主が、致命的な一撃を与えられたとあります。そして、戦車からの落ち方が悪かったため、関節が外れ、傷だらけとなり、両目から蛆がわき、激痛が走ったとあります。そして異国の山中で無残な死をもって、その一生の幕を閉じたとあります。

しかし、アンティオコス・エピファネスに当てはまるこれら一つ一つの特徴は、そのまま不法の人、反キリストにも表れます。「彼の力は強くなるが、彼自身の力によるのではない。」とありますが、黙示録 13 章には、「13:2 竜はこの獣に、自分の力と位と大きな権威とを与えた。」とあります。そして、「あきれ果てるような破壊を行ない、事をなして成功し」とありますが、同じく彼の名前の数字、六百六十六を押していない者は、物の売り買いができません。そして、彼は神殿の中に入って、自分を神として、自分の像を置き、そこで物を言わせます。その像を拝まないものは、みな殺します。そして、「聖徒の民を滅ぼす」とありますが、黙示録 12 章によれば竜が、イスラエルの民を全てのみ込もうと洪水を起こすことが預言されています。その洪水とは軍事的行動です。そして、「君の君に向かって立ち上がる」は、再臨のキリストに反キリストは世界の軍隊を率いて戦いに挑みます。しかし、「人手によらずに、彼は碎かれる。」とありますが、主ご自身の口から出る鋭い剣で打たれて、生きてまま火の池に投げ込まれるのです。

午前礼拝でも話しましたが、ここに希望があるのです。反キリストの現れは、前代未聞の大患難をもたらしますが、しかし、それは定めの時までなのだということです。苦難は一時的であり、神がその悪を滅ぼす時を既に定めておられるのだということです。私たちは、裁きと復讐を積極的に、主ご自身に任せればよいのです。まことのキリストは、人に殺されても、人手によらず生き返ります。偽のキリストは、人に殺されなくても、人手によらず殺されるのです。前者は死んでも甦られ、後者は生きていても、必ず殺されます。

8:26 先に告げられた夕と朝の幻、それは真実である。しかし、あなたはこの幻を秘めておけ。これはまだ、多くの日の後のことだから。」

ガブリエルは、念を教えています。二千三百日の幻について真実であると言っています。それから、今の幻については、「秘めておけ」と命じました。それは、「多くの日の後のことだから。」です。御使いはこのことを、これからも繰り返します。最後の幻は、最後の戦いについてのことであり、彼は再び意識を失ってしまいました。けれども、その幻を御使いが告げた後に決まって、「この幻を秘めておけ」とダニエルに命じています。「封じられているからだ(12:9)」と言っています。こんなにもはっきりした、鮮やかな幻であるにも関わらず、それを知ることのできないというもどかしさと驚きが、ダニエルを満たしていたことでしょう。

しかし、私たちには多くの日の後のことではありません。「黙示録」です、これは「啓示録」であります。これまで隠されていたもの、封じられていたものが開示されるのです。そして、多くの日の後のことではなく、今すぐにでも起こることを語られました。ですから、私たちは主にあってこれまで読んで来たことは、切迫していることなのだと思えることができます。主はいつでも、私たちを地上から取り除かれてもおかしくありません。そしてますます、不法の秘密が働いています。その中で私たちがすべきことがあります。「エペソ 5:16-21 機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい。また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい。キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。」

8:27 私、ダニエルは、幾日かの間、病気になったままでいた。その後、起きて王の事務をとった。しかし、私はこの幻のことで、驚きすくんでいた。それを悟れなかったのである。

「病気になったまま」とありますが、天使ガブリエル本人が神の言葉を告げたので、その栄光と聖さに触れたからでしょう。そして「驚きすくんでいた」とあります。理由が「悟れなかった」からです。示されているのに、知らされていない、悟れないもどかしさです。特にダニエルにとっては、これからエルサレムに同胞が戻り、神殿を再建するのに、それなのに神殿が荒らされるのか？という驚きがあったことでしょう。一体なぜ？という思いが走っていたと思います。神の人であるがゆえに、先の事を知らされた葛藤です。弟子たちもそうであったでしょう、キリストであることが示されたのに、なんとローマの十字架です。けれども、三日目に甦るとイエス様は言われていたのです。私たちも、神に現実を、厳しい現実を示されるかもしれません。しかし、その後に将来と希望があります。暗闇のトンネルの向こうは光なのです。